

## 繪畫美學 [二]

(ウイリアム・ナイト氏の『美の哲學』より)

服 部 嘉 香

藝術概論の章に於いて、又、詩論の章に於いて、藝術の藝術たる所以は模倣イミテーションにあるか又理想アイデアリチー(此の ideality を單に理想と譯しては少し不徹底である、委しく言へば對象を理想化する力を意味してゐるのだ——譯者)にあるかといふ問題は或る範圍まで論究しておいた。然し片手落ちな模倣説は、恐らく彼の如何なる藝術よりも、造形藝術プラスチック・アートに屬するものに當て拵める場合に、明瞭な意義を附帶して來るに過ぎなからう。繪畫に於ては、繪具を用ふる爲めに、畫家は「形」と「色」とを巧みに融和する、從つて「形」と「色」とが互に兩者の優れた特色すぐれた特色を相助けて、その結果として何んな自然を描いてもその模倣では無くて、其の解説インタプリテーションともいふべきものが出來上る。風景畫——かの模倣説は、ともすれば風景畫に於いて其の立脚點を求めやうとする——は、單に外界自然の模寫カピーである限りは成功したものととは言はれない。所謂海にも陸にも曾て現はれなかつた光を以て自然を飾つたものが、立派な風景畫なのである。

そこで吾等は、今、繪畫が如何なる範圍まで模倣から生れるか、又如何なる範圍まで模倣以外に立脚するかを調べてみたい。けれども、茲に注意すべき事は、風景畫にあつても、肖像畫にあつても、繪畫の主要な魅力チャーム及び根本の勢力パワーが必ず「暗示」に起因するといふ一事である。自然の再現たる風景畫の魅力は、描がかれた風景そのものゝ妖力と同じもので無ければならぬ。例へば、海や空の美を解し得る人に對して、海や空の特に心を惹く點は「深さ」と「廣さ」との暗示である。從つて燦爛たる光の下に見た近景の美と、朦朧とした光の下に見た遠景の美とは、同一の暗示力を持つてはゐない。ラスキン氏は更に次の事實について吾々の注意を促

がしてゐる。即ち風景畫家——時として肖像畫家でさへ——は、出来る限りは「空」にある光ばかりでなく、空から放射する光をも捉へて、光彩ある背景を吾等に示すものであると。此の事實は、單に描かれた風景畫よりも、暗示された風景畫に高い價值のある證據となるのでは無からうか。

## 劇の背景 〔一〕

山 崎 紫 紅

劇の背景といふことに就て、何か話せとの仰せ、お受けはしたものの、甚だむづかしい問題です。そこで話題を小さく取つて其責を塞がうかと存じます。

物は眞なるが好しといふ、この語は理論のやがて實際に劣るといふことになる、この見地から出立して、極端なる説を立てると、それが寫實一點張となつて、私の考へてる點から申しますと、極めて奥行の浅い次第に成行くのである。理論といふものは、事實を綜合した上に於て生ずるもので、理論が事實でないと同時に事實を離れても理論が外に大切なものとして存在する價值がある、なぜとなれば理論は事實を踏まへて立つものである、理論は事實の從屬でないが、事實は理論の從屬たるべきものだ。

幾多の事實は理論の應用に供せられる。私は私の問題を語るに於て、私の云ふことは理論に據を置かぬ、一つの事實として聞いて頂きたいと思ふ、なぜかなれば目下の私の多忙は、語るに吝かならねども、推論考説するに、時間の少い譯合があるからである。

私は脚本を書くのにあまり背景に重きを置かなかつた。私は日本の劇界に置ける背景の進歩に、さまでの疑ひを挿んでおらなかつた。私の「處女作」上杉謙信が眞砂座に於て上場せられた時、私の誂へて書いた背景の註文が、始めて舞臺に現出されたとき、私はあまり失望しなかつた、いな満足したのであつた。私の脚本が始めて舞臺に上つた軽い喜悅に包まれて、そして萬事を放擲したのでなく、私は私の簡易なる註文がな